贋作　徒然草

日本プロ野球組織コミッショナー
根來（ねごろ）　泰周（やすちか）

昭和7年7月生まれ。法務事務次官、東京高等検察庁検事長、公正取引委員会委員長等を経て、現在弁護士、浄土真宗本願寺派監正局長、消費者機構日本会長。

親鸞教徒の私は、何事も「御恩報謝」の気持ちで過ごすべきものと思い定めながら、日々見聞きするものについて不平、不満、不足の気持ち、あるいは心配の念を抱くのは、信心獲得に至らぬ私の「煩悩」のなせるわざなのか。銀座で貰った小冊子の随筆に「年を取るにつれて不平、不満が一杯になり、その結果この世に生きるのが嫌になり、未練を残さずにあの世に行けるのだ。」とあって自分もいよいよその境地に到達したのかと思うようになった。極論かも知れぬが上（カミ）から下（シモ）まで日本列島を覆う「低俗迎合」「軽佻浮薄」「金銭至上」「権謀術数」には、ほとほと嫌気をさしているというのが偽らざる心境である。

もとより罪悪深重煩悩熾盛の身であるから外部からの規制によりその身の在り方を正していくことは必要欠くべからざることだが、とにかく最近は、自己責任といいながら、外面からの締め付けが多く、「人間は考える葦」というようなことが死語化しつつあるのではないかと思う。書店に行けば「万引きは犯罪です」と掲示され、電車に乗れば「発車間際の飛び乗りは危険です」「痴漢は警察、駅員に通報を」と呼び掛ける。煙草の吸い殻のポイ捨ても過料だ。このように何かに付けて外から人間の行動を縛ろうとする。よし悪しの内面的判断に任せたらどうかと思うことも多い。これでは、人間の深い思慮とか判断力をスポイルしてしまうことになり、我々は、外部からの規則、規律によって操り人形の如く行動するという習癖に陥らないかと危惧するのである。一方においては、規則等に触れなければなにをしてもよいということにならないかという心配もある。もっと人間の内面を信用したらどうか。

物事には、形式と実質がある。実質を見ないで形式だけで価値評価をするという傾向も顕著ではないか。「改革」論議もそうだ。

「改革」といえば侵すべからざるもの、黄門の印籠のように働く。少し前は、政治家のなすことは多少「うさん臭い」というような見方をする風潮もあった。今は、「政治主導」だ。政治家のされることは民意に基づく正当なもので、役人の言うことは、「省益擁護、自己保身」の底意に基づくものでいかがわしいというような決め付けの議論が目につく。「官から民へ」とのキャッチ・フレーズもそうだ。その可否は、事柄の実質を慎重に判断して決めることだろう。偽装設計のようなことが起こると、途端に見直し議論をするというのもお粗末だ。プロ野球球界の話もそうである。選手は、「純真」、これに対して球団、その親会社、経営者が商業主義に毒された「腹黒い」という見方だ。プロ野球七〇年の歴史の中で球団、その親会社がどれだけの犠牲を払ってきたか、そのお陰でプロ野球の今日があるのである。かって籍を置いた「法務・検察」についても同様で、「法務」と「検察」を対立的に捉え、「法務」を、さながら政治家の走狗のようにいい、「検察」を、正義の味方的にいうマスコミ議論も優勢であった。実態を見ぬ教条的にして馬鹿気た見解という他はない。

「衣食足りて礼節を知る」というから、この世で大切なものは、「お金儲け」であろう。反面、我々の心の問題すなわち精神の問題が軽視され、その指導者を欠いているのは寂しい。この精神的荒廃から脱し、人間社会の両輪をなす物質と精神のバランスを得た社会を創造するために、「精神的指導者よ出でよ」と叫びたい気持ちで一杯である。

次号は、尊敬する税制調査会会長石弘光先生にお願いします。

Ⓡ

（リレー）小長啓一 氏→野々内隆 氏 → 根來泰周 氏